

# ネギ一束

田山花袋

青空文庫



お作が故郷を出てこの地に来てから、もう一年になる。故郷には親がいるのではない、家があるのではない、力になる親類とてもない、村はずれの土手下の一軒家、壁は落ち、屋根は漏り、畳は半ば腐れかけて、茶の間の一間は藁が敷き詰めてある。この一軒家の主が、お作のためには、天にも地にもただ一人の親身の叔父で、お作はここで娘になった。

ぼろぼろの襤褸つづれを着て、青い鼻涙はなを垂たらして、結う油もない頭髪を手拭てぬぐいで広く巻いて、叔父の子を背負いながら、村の鎮守で終日田舎唄いなかうたを唄うころは無邪気であった。筋の多いふかし芋いも、麦飯むすびの結塊むすび、腹すの減いた時には、富家の子を騙だまして、銭を盗み出

させて、二十銭の銅貨に駄菓子<sup>だがし</sup>を山ほど買つて食つた。根性が悪いといつては、村の家々に憎まれ、若い衆に打たれ、菓物<sup>くだもの</sup>を盗んだといつては、追いかけて捉え<sup>とら</sup>られて、路傍の門に細引きでくくり付けられ、あるいは長い物干竿<sup>ものほしざお</sup>で、走る背なかを撲<sup>う</sup>たれて、路上に倒れて膝<sup>ひざ</sup>頭<sup>がしら</sup>を石に二寸ほど切つて泣いたことなどもあった。白壁の土蔵、櫛<sup>かし</sup>の刈り込んだ垣<sup>かき</sup>、冠木門<sup>かぶきもん</sup>、物心がついてから心から憎いと思つたのは、村の物持ちで、どうしてこの身ばかりこう賤<sup>いやし</sup>く、こう憎まれ、こう侮られ、こう打たれるのかと思つた。それに、叔父にもよく打たれた。言うことを聞かぬとか、物をよく食うとか、仮寝<sup>うたたね</sup>をするとか、なんぞと言つては、どやしつけられるのがつらさに、ある時などは、村の路<sup>みち</sup>に通るかか

た旅商人らしい男に縋すがつて、どこへでもいい、どんな難儀をして  
もいいからいつしよに連れていってくれと頼んだ。村から西に一  
里ほど、水の少ない石川があつて、その向こうに楊樹やなぎの繁茂、路  
のほとりに一箇の石地蔵、それをお作はいつでも思い出した。追  
いかけて頼んでも縋すがつても、旅客は知らぬ顔をしてずんずんと先  
に行く。初夏の日影は美しく光つて、麦の緑が静かな午後ごごの微風  
に揺うごかしている。その石川の楊樹のところに来て旅商人はふと立ち  
留とどまつた。瘦やせた、顔の青い、髪かみの延のびた男であつた。背には風  
呂敷ろしき包み、紺この脚絆きやはんも長旅の塵埃ちんがいに塗まみられて、いかにも疲れ果て  
たというふうであつたが——立ち留とどまつて、あとを追いかけてき  
た田舎娘を待まちつた。伴つれていってやるから、なんでも言うことを

聞くかという。お作は喜んだ。

その楊樹の繁みをお作はいつも思い出す。まだ何ごとをも知らぬ小娘、長旅の疲労に伴って起こった男のはげしい慾望、彩色を施した横綴じとの絵、——二十分の後、旅客の大跨おおまたで走って遁にげていくのをお作は泣きながら追った。けれど女の足でどうしてこれに追いつくことができよう。欺かれたと知って、忿怒いかりがたちまち心頭を衝ついて起こった。お作は小石を拾ってあとから投げた。一つが旅商人の背中に当たった。と、振り返ったその顔、それが今でもありありと眼に見える。

その時が十四歳、それから十九歳の昨年まで、お作はその呪のろう

べき故郷を去ることができなかつたのだ。叔父夫婦の虐待、終日の労働、夏のじりじりと眼も眩む日に雇われて、十二時間の田草取り、麦の収穫の忙しい時にはほとんど昼飯を食う暇もない。それに養蚕の手伝い、雨の日の桑つみ、荷車のあと押し、労働という労働はせぬものとはなかつた。またある時は、機の工場に雇われて、一日に一反半の高機織り、鼻唄を唄う元気さえなくなつた。箴をしめる腕は、自分のか他人のかわからぬくらいにつかれ果てることもあつた。若いというのは人間の幸福、いくらにはげしく働いても、夜は楽しい機織り室の戸を、ことごとと叩く音がして、闇に白い頬かぶりの男の立ち姿、お作の朋輩にはこういう羨ましい群れがたくさんあつたけれど、お作はこの若いという幸

福をも充分には受けえられぬ不幸の身であつた。彼女は額の大きい、鼻の丸い、ちぢれ毛の、鉄色した醜い女であつた。

しかし十九歳で故郷を去つたお作には相手があつた。この界かいわ隈いでも有名な祭文読み、博奕ぼくちが好きで、女が好きで、ことに声

が好いので評判であつた。生まれは西のものだそうだが、一年ほど前からこの地に来て、あるいは鎮守の祭り、村の若者の集合するところなどに呼ばれて、錆さびびた太い調子づいた声に、多くの無む智ちの男女をあくがれしめたが、突然お作はこれとでき合つて、こんなところはつまらぬ、人の出盛る温泉場に行けばもつとおもしろいことがあると、誘うも誘わるるも、行く水の思いのままなる二人連れ、こんな故郷はどうでもよいと、お作は闇に住み馴れた



地を離れた。

西に百里の温泉場に来て二人は暮らした。楽しかったのは、ほんのつかの間、いや、旅に出るより早く二人は既に——争いを始めた。野に生まれて、野に生お立たつて、そして野に食物をあさる群れの必ず定まって得る運命——その悲しいつらい運命にお作も邂逅でくわした。

捨てられてお作は泣いた。続いて、十四の時、知らぬ旅客の背中に石を投げつけたと同じような忿怒いかりをはげしく心頭に起こした。けれど泣いたり、怒おこつたりしただけでは、その終わりを告げることはもうできなかつた。お作はその時懐妊して七か月目であつた。

七か月より臨月までの苦痛、労働のできる間は種類を選ばず労

働して、刻々に迫り来る飢餓と戦った。新道の道普請に、砂利車じやりのあと押しをして、熱い熱い日の下に働いていたが、ふとはげしい眩惑げんわくを感じて地に倒れ、援けたすられて自分の小屋に送り込まれてからは、いかな丈夫な身体からだもどうすることもできず、憐みの眼と情けの手に、乞食こじきにひとしい月日を送った。

蟾蜍がまのような大きい腹を抱かかえて、顔は青く心は暗く、初産の恐怖は絶えず胸を痛めて、何がなし一刻も早く身二つになれかしと祈った。腹の中の子の動くのを覚ゆる時には、これさえ産まれたなら……と常に思った。そうしたならまた労働して自分だけのこととしよう。そして無情の男を捜し出して恨みを晴らしてやろうと思った。時にはまたその男のことを考えて、どうかしてもう一

度いつしよに暮らしたい。かわいい子が生まれて、それを見せてやつたなら、男もきつと折れて、やさしくなるに違いないと思つた。お作はまだ男を恋うていた。

子は産まれた。

産まれぬ前と生まれたあとの事情がまるで変わった。身二つになりさえすればよいと思つたが、それは誤りであつたことがすぐわかつた。幼いながらも人間の絶えざる要求、乳を求めて日夜に泣く赤児の声、抑ゆることのできぬ強いはげしい母親の愛情、お作は離るべからざる強い羈絆きずなのさらに身にまつわるを新たに覺えた。

過労と營養不良とで、乳が十日目ころからぱったり留まつた。

赤児は火のついたように間断ひつきりなしに泣く。それを聞くと、母親というものは総身の血が戦ふるえるほどに苦しく思った。で、お作もその身の食物を求めるとよりもまず赤児の乳を尋ねまわった。乳酪ミルクを買う銭がないので、隙ひまをつぶして、あっちこっちと情け深い人の恵みを求め歩いた。で、昼はまずどうやらこうやら過ごしていくが、夜が実につらい。出ぬ乳をあてがって、畳の足に引つかかると一間の中をあっちこっちと動物園の虎とらのようにして揺ゆつて歩くが、どうしても泣きやまぬ時などは、いっそ放り出してしまおうかと思うほどだ。

産さんじよく褥じよくを早く離れた結果と、營養の不足と、精神の過労とで、

今までついぞ病んだことのないお作も、はげしい頭痛と眩惑とを

感じて、路を歩いてもおりおり倒れそうになることがある。ある日などは、やむなく終日を一室に倒れていたことなどもあった。だから、労働して食を得ようなどとは思ひも寄らぬ。飢餓と病と心労と——お作はいよいよ苦境に陥った。

一月ほど経ったある日の午後であつた。

お作は起き上がった——室は暗く汚い。一隅に小さい葛籠、そ

の傍に近所の人の情けで拵えた蒲団に赤児が、つぎはぎの着物を着

て寝ていて、その向こうに一箇の囲炉裏、黒い竹の自在鍵に黒

猫のようになつた土瓶がかかつていて、そばに粥を炊く土鍋が

置かれてあるが、幾日にもそれを炊いた跡が見えない。木の燃え

さしがだらしなく転がっていて、畳の黒く焦げたのがきわだつて

眼につく。これは祭文読みとお作と喧嘩けんかした時、過あやまつて取り落  
として燃えたのであつた。戸外は秋の灰色に曇つた日、山の温泉  
場はやや閑ひまで、この小屋の前から見ると、低くなつた凹地くぼちに二階  
三階の家屋が連つて、大湯おおゆから絶えず立ちあがる湯の煙は静かに  
白く靡なびいていた。

溪流たにの瀬の鳴る音が遠くで聞こえる。

お作は立ちあがつた。二日以来飯をろくろく食わぬので、足が  
妙にふらつく。こう腹が減つてはしかたがない。なんでもいいか  
ら食えるものを少し捜してこようと思つたのである。と、同時に  
赤児が声を挙あげて泣き出した。で、お作はふらつく脚あしを踏み占め  
ながら、まず抱き上げて、出ぬ乳を吸わせたが、容易に泣きやも

うともせぬので、今度は黒砂糖を水に溶かして、吸い口をあてが  
つてみた。で、どうやらこうやら泣きやんだので、それを古い帯  
で背にくくりつけて、そのまま戸外に出た。

灰色の雲は低く垂れて、なんとなく頭をおさえられるような空模  
様であった。お作の小屋は温泉場の裏の斜坂の中央に当たってい  
るので、下にはまずまばらに茅葺屋根かやぶきやね、大根の青い畑が連つて、  
その下に温泉場、二階三階、大湯から出る湯の煙、上を仰ぐと、  
同じ畠はたけの斜坂さかの爪つま先さき上がりきになつてゐる間に一ひと条すじの路がうね  
うねと通つて、その向こうは煙るようななら榎ぼやし林の灰色が連続し  
た。

高い山には炭焼きの煙が見える。

お作は家を出てその畠道を歩いた。つらいその身の境遇や、悲しい追懐よりも、ひもじいという念が第一にその胸に押し寄せてきて、何か畠に食うものはないかとあたりを見まわした。牛蒡畑ごぼう、大根畑が一面に連なり渡っていたが、ふと、五、六間先に葱ねぎの白い根を上げた畑が眼に入った。

われを忘れて、畑の中に入って、ほとんど人の物を盗むなどという念も起こらぬ中に、たちまち一束の葱を取って、それを揃そろえて、もとの畠の道に出た。その時、同じ畠道を、一人の男——かねて見知っている温泉宿の年寄りの番頭がこつちに歩いてきた。

葱を一束抱えてお作の立っているのを、ふと眼につけて、

「葱かね！」



と言つて笑つて通り過ぎた。

お作はぎよつとして我に返つた。自己おのれの罪跡を見つけられたと思つて、身が地にすくむような気がした。はげしい飢餓をも忘れて、茫然ぼうぜんとして立つていた。見ると、その年寄りの番頭は一步その細い爪先上がりの道を静かに静かに歩いていく。黒い縞しまのどてらが、青い畑と灰色の森との間をてくてくと動く。ふと林に入ろうとする畠から、鋤すきを荷になつた一人の百姓が出てきて、だんだんそこつちへおりてきたが、前の番頭に出逢であうと、二人は立ち留まつて何ごとをか語つた。いや、番頭の白い顔がちらとこつちを振り返つたのが見えた。てつきりその身の罪を告げている！とお作は思つた。お作は顔を蒼青まっさおにしてぶるぶると戦ふるえた。

一時間後に一事件が起こった。裏の山の林で、嬰兒殺しがあつたという噂が温泉場に知れ渡った。見てきた男に聞けば、林でおいおい泣き声が聞こえるから行ってみると、それは小屋の祭文読みの嬪で、自分で緊め殺した赤児を抱いて声を挙げて泣いていた。そうな。それから自分も死ぬつもりでもあつたのか、そばの樹には細帯が長く吊るしてあつたとの話であつた。で、駐在所の巡査が二人まで剣をじゃらつかせながら駆けていく。村の世話役の男が呼吸を切つて飛んでいく。そのあとから村の若者、子供、女、赤い蹴出しやら、大縞の絆纏やら、時計の鎖を絡ませた縮緬のへこ帯やら、赤鼻緒の黒塗り下駄やら、ぞろぞろとその細い畠

道には、人が続いて、その向こうの林の中に巡査の制服が見え、おりおりけたたましく泣く女の声がきこえた。灰色の侘<sup>わび</sup>しい空が低く垂れた。



# 青空文庫情報

底本：「蒲団・一兵卒」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年10月20日改版初版発行

1974（昭和49）年11月30日改版8版発行

入力：久保あきら

校正：伊藤時也

2000年9月28日公開

2001年10月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# ネギ一束

田山花袋

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>